

『極秘諸国城図』所収「大坂 真田丸」図および 『諸国古城之図』所収「摂津 真田丸」図の再検討 ——千田嘉博氏の大澤・松尾への批判に応えて——

大澤 研一
松尾 信裕

はじめに

2016年11月に刊行された『松江歴史館研究紀要』第5号に、奈良大学の千田嘉博教授が松江歴史館所蔵の『極秘諸国城図』所収「大坂真田丸」図（以下、「松江図」〔図1〕）の評価を「新発見の大坂真田丸」絵図の学術的価値について」と題して論考を上梓された〔千田嘉博 2016〕。その論考の中で、すでに存在が知られていた広島市中央図書館蔵の浅野文庫『諸国古城之図』所収の「摂津 真田丸」図（以下「広島図」〔図2〕）について、大澤と松尾が17世紀後半以降の真田丸周辺図であると評価した〔大澤研一・松尾信裕 2016〕（以下、前稿）ことを痛烈に批判された。

同じ研究者として、この批判に応えなければ無言の承諾と捉えられかねないと判断し、既に1年ほど経過してしまったところではあるが、この誌面を借りて筆者らの意見を陳述するものである。

ところで、千田氏は新出の「松江図」に接し、「広島図」との関係について地形描写はほぼ一致し、註記には異動がみられるものの縄張の名称などで相互に補完しあう関係にあることから、真田丸の実態に迫ることができるとされた。また「松江図」の堀には「惣構堀」の註記があり、彩色をほどこしている点で「広島図」よりも描写が優れているとも評価された〔千田 2016〕。千田氏は「松江図」の出現をうけ、これら両図が属する「真田丸図」の系統が真田丸の存続当時の姿を伝えているという見方を強めておられるようである。

しかし、そうした評価を下すのは果たして妥当なのだろうか。筆者たちは千田氏の「広島図」に対する理解には賛同できず、その旨を論拠とともに前稿において述べたところであるが、後述のようにそれらは現在も有効であると考えている。そこで迂遠な作業とはなるが、本稿では反批判の予備作業としてまずは千田氏の「広島図」に対する見解の問題点をあらためて確認するところからはじめたいと思う。

なお、筆者の一人である松尾は千田論文が公表された後の2017年3月、『大阪歴史博物館研究紀要』第15号に『諸国古城之図』所収「摂津 真田丸」図の再検討を執筆し、千田氏によって信頼性が高いと評価された「松江図」と「広島図」は、17世紀後半に刊行された幾つかの「大坂三郷町絵図」を参考にしたものであろうと考えたところである〔松尾 2017〕。ただし、これは松江図発見を報

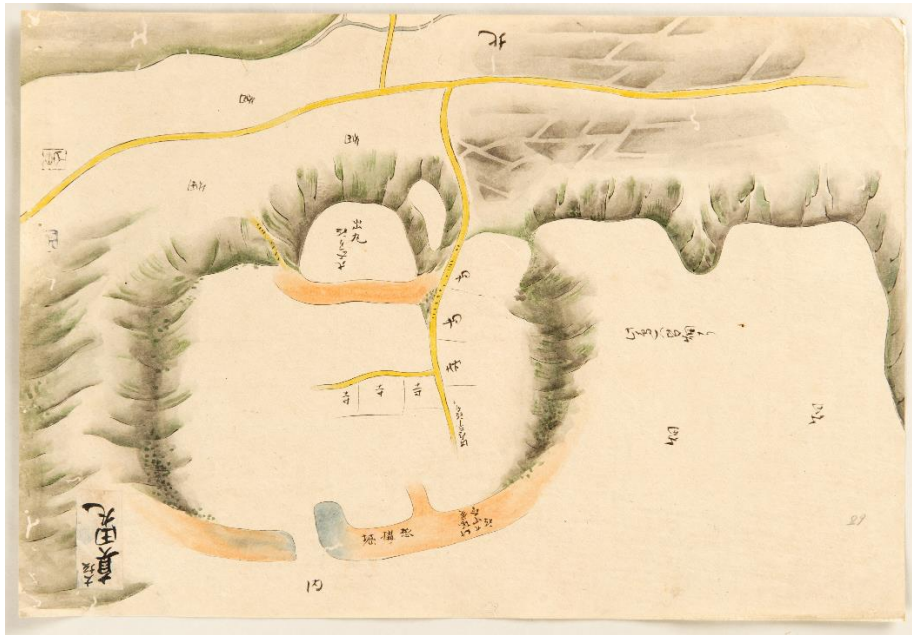


図1 『極秘諸国城図』大坂 真田丸



図2 『諸国古城之図』摂津 真田丸

じる 2016 年 7 月 13 日付読売新聞の記事をもととし、千田論文が公表される以前に脱稿したものであった。そのため、本稿ではその内容にも触れつつ千田氏の批判に応え、あらためて「広島図」（および松江図）の描写内容とその意義について述べることにしたい。

1. 「広島図」に対する千田氏の理解

「広島図」に対する千田氏の注目は 2015 年 3 月発表の「新説！「真田丸」は孤立無援の二重構造の巨大な要塞だった！」[千田 2015a] が早いと思われるが、同書は口述体となっているので、主旨を同じくする同年 11 月刊行の千田著書『真田信繁「勝利」への条件』[千田 2015c]⁽¹⁾ で千田氏の見解を

確認してゆきたい（数字は千田氏著書の頁）。千田氏の「広島図」理解のベースにあるのは『大阪上町台地の総合的研究』[公益財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所・大阪歴史博物館 2014]で公表された豊臣時代の復元地形（古地理図5 豊臣時代後期）である。千田氏はここで示された復元地形が「摂津 真田丸」の描写と鮮やかに一致した（2015c/21～22 頁）と評価し、「これは、「摂津 真田丸」の信憑性を証明している」と断言された（2015c/22 頁）。そして、「跡地が畑や田んぼになり、寺院が建ち並んでいく様子を「ありのまま」に描いたことは、当時の真田丸跡の現状を、恣意的な復元を交えずに記録した調査者の意図を物語る」（2015c/22 頁）との評価を与えたのであった。すなわち千田氏の「広島図」に対する理解は、地形表現については豊臣時代後期の地形がそのまま反映され、それに田畑や寺院など絵図作成時の現況情報が載せられたというものだったのである。

そして「広島図」の最終成立年代については直接の言及はないものの、千田氏は「広島図」を含む「諸国古城之図」を「一七世紀後半に全国の主要な城跡の図面を集めたもの」（2015c/20 頁）と紹介していることから、おおよそその頃と判断していたものと推測される⁽²⁾。したがって、「広島図」は17世紀後半頃の真田丸付近の状況を含めて描いた図という評価であったと考えられる。

しかし、その地形表現に関しては、復元地形図が大坂の陣後の地形改変を受けた姿であり、真田丸存続当時の地形がそのまま反映されたものとみなせないことは前稿で指摘したとおりである。また、千田氏が主張される復元地形と絵図描写の「一致」についても、どの部分をもってそれが証明されるのか具体的な説明は示されておらず、了承できない。

こうした疑問点があるなかで、千田氏はやはり2015年11月の奥付をもつ著書『真田丸の謎 戦国時代を「城」で読み解く』[千田 2015b]において、「広島図」の成立年代と描写理解について見解を一步“進めた”。同図を「真田丸が実際にあった時代から数十年後の史料」（2015b/64 頁）と述べるとともに、新たに「広島図」の祖本を想定し、「摂津 真田丸」の祖本となる絵図は、真田丸跡を近世初頭に踏査した図面として、ある程度流布していたのでしょう」（傍点筆者、以下同じ）と述べ、「広島図」が真田丸の廃絶後さほど時間をあけない頃の状況を示すという、踏み込んだ発言をおこなったのであった。

この発言と連動していると推測されるのが、同図に描かれた六つの「寺」（南北方向に三カ寺、東西方向に三カ寺）の理解の変化である。この「寺」表記について、千田氏はもともと先に引用したように「寺院が建ち並んでいく様子を「ありのまま」に描いた」、つまり真田丸破却後に成立した「寺」が「広島図」に盛り込まれたと考えていた。それが『真田丸の謎 戦国時代を「城」で読み解く』215頁の図5-1「真田丸推定地付近」においては真田丸の中に東西・南北両方向の「寺」を置いており、真田丸が機能した段階からこれらの寺院が存在したと考え方を転じたことがわかる⁽³⁾。

以上のように千田氏は「広島図」の成立時期と描写評価に関する見解を改めてきており、特に成立時期については17世紀前半に引き上げる方向で考えておられることは相違ない。見解の変更自体は研究の深化ということでありうる話ではあるが、千田氏の問題は見解を改めるにあたっての具体的論拠が示されておらず、読者がその可否を検証することができない点にある。

たとえば祖本の想定であるが、その存在がありうることは筆者らも想定するところであるが、その年代については具体的に考証がおこなわれているわけではない。なぜ「広島図」が「真田丸が実際にあった時代から数十年後の史料」ないしは「近世初頭」ということがいえるのか、はなはだ不分明と

いわざるをえない。また「寺」の創建年代理解についても千田氏は筆者らの前稿を批判したが、後述するようにそれは明らかに誤っている。

このように「広島図」に対する千田氏の検討はいくつかの問題点をはらむものであり、その結論に賛同することはできないが、そうしたなかで「松江図」の発見が報じられたのであった。そして千田氏は前述のように、「松江図」の地形描写が「広島図」のそれとほぼ一致し、註記については異同があるものの、縄張の名称などでそれぞれが相互に補完しあう関係にあるとみて、「松江図」は真田丸の実態に迫れる重要史料と評価とした〔千田 2016〕。

「松江図」の出現が学術的に大きな意義をもつことはまちがいないだろう。しかし、前述のような「広島図」検討の手続きや理解に課題が残るなかで、「松江図」と「広島図」の違いを直ちに補完しあう関係とみなして利用するのはいかなるものだろうか。まずは両者の違いを真摯にみつめ、それぞれの特徴と史料性格を明らかにすることが求められていると考える次第である。

そこで、次章において「広島図」と「松江図」の註記を比較することで、それぞれの史料性格を考えてみたい。

2. 「広島図」と「松江図」の註記について

千田氏はその論考のなかで、「広島図」と「松江図」を比較し、特に墨書による註記について具体的な対応関係を示した。これは両図の性格の違いを明らかにするうえで重要な作業である。したがって、本稿でも千田氏の比較一覧に補訂を加えた表を提示し、それをもとに「広島図」と「松江図」の特徴を考えてみたい。

一見してわかるように「松江図」にくらべ「広島図」のほうがずいぶんと註記が多い。この点はすでに千田氏が指摘しておられるが、問題は註記の多寡だけではなく、その内容的な傾向である。この一覧から両図には次のような特徴のあることが指摘できる。

【表】

	項目	松江図	広島図	備考
1	資料名称	「大坂真田丸」(付箋)	「摂津 真田丸」(題簽)	
2	真田丸主郭南堀外	「田」	(なし)	立地情報
3	真田丸主郭南西堀外	(なし)	「此辺上本町」	立地情報
4	真田丸主郭南西堀内	(なし)	「上本町門口ノ由 西向ト云」	立地情報
5	真田丸南堀中央	「惣構堀」	「此所池」「カラホリ」	城郭情報
6		「此堀廣廿四五間程」	「此堀廣サ廿四間程」	城郭情報 数値違い
7	真田丸主郭内堀際	(なし)	「畑」「畑」	立地情報
8	真田丸主郭内南北街路東側	「此道二丁程有リ」	「此道二丁程有」	立地情報
9	真田丸主郭曲輪中央東西街路南側	「寺」「寺」「寺」	「寺」「寺」「寺」	立地情報
10	真田丸主郭東側南北街路東側	「寺」「寺」「寺」	「寺」「寺」「寺」	立地情報
11	真田丸主郭北側堀内	(なし)	「浅キ堀也」「此堀廣サ八間程」	城郭情報
12	真田丸主郭北側の小曲輪内	「出丸」「廿五間内」	「二十間程」	城郭情報 数値違い
13	真田丸東側台地上	「畑」「畑」「此辺ハ皆畑ナリ」	「畑」「畑」「此辺皆畑也」	立地情報
14	真田丸東側台地下	(なし)	「野」	立地情報
15	真田丸北側谷中	「畑」「畑」「畑」	「畑」「畑」「畑」	立地情報
16	真田丸北西側谷対岸	(なし)	「町裏ナリ地形少高シ」	立地情報
17		(なし)	「大坂本城此方ニ見ル」	立地情報
18	真田丸北東谷中	(なし)	「浅田」「浅田」	立地情報
19	真田丸北東谷中、街路北側	(なし)	「大和道」	立地情報
20	方位	「北」	「北」「東」「南」「西」	
21	所蔵印	該当朱印無し	「浅野図書館蔵書之印」「貴重図書」	

①両図共に城郭設備の註記がみられるが、同じ箇所を指しながら「惣構堀」（松江図）と「カラホリ」（広島図）のように表現の違いがみられる。また、堀の広さなど城郭にかかわる部分での数値情報も微妙に異なっている。さらに「松江図」では「惣構堀」・「出丸」のような機能に踏み込んだ専門的な表現もみられる。

②「寺」や「畑」といった近隣の景観情報については同一表現となっている。

③「広島図」には「此边上本町」のような真田丸の所在地や立地環境を示す情報が多くみられるのに対し、「松江図」にはみられない。

加えて描写面では、千田氏が重視する「松江図」の「出丸」横に付属する腰曲輪の有無は大きな違いといえるだろう。

以上の註記・描写の違いからうかがえるのは、「松江図」については真田丸の城郭構造に対する関心の高さである。その城郭構造を専門的見地から復元・考察する意図をもって作成されたとみてもあながちまちがいなかろう。一方、「広島図」は真田丸の立地環境に関する註記が比較的充実しており、構造もさることながら真田丸が大坂のなかでどのような場所に立地したのかという点に関心をもちながら作成された図とみることができよう。

とりわけ「松江図」については「惣構堀」や「出丸」という縄張にかかわる用語を使用している点が注目される。これらは城郭について専門的知識をもつ「松江図」の作成者が真田丸の縄張と機能を復元的に検討した結果、そのように”認定”したものが註記されているとみるのが妥当と思われる。つまり、「松江図」は真田丸の考証図としての性格が強い図と評価すべきなのである。

このように「松江図」と「広島図」とでは作成者の関心の所在が違っていたとみるべきであり、両図が成立の系譜のなかで直接的に連続する関係にあると考えるのは無理があろう。ただし、註記のなかに同一のものがみられることも事実である。したがって現段階では、この両図は共通する註記をもつ祖本をもとに別々に誕生した系譜に属する図と考えるのが穏当なところではないかと思われる。数値や地形の捉え方の違いがみられることは、同じ祖本を用いながらもそれぞれの作成にあたって現地での確認作業がおこなわれるなかで、その見聞が反映されたことを物語っているのではなかろうか。

よって、両図は祖本に由来する共通の註記をもちながらも、それぞれの作成者の関心を反映して作成されたとみるのが妥当と考える。「松江図」の「惣構堀」や「出丸」、「広島図」の「カラホリ」など城郭の縄張に関する註記のズレは、その註記があくまで作成者の認定・評価によるものであることを如実に物語っている。つまり「惣構堀」・「出丸」・「カラホリ」のいずれをとってもそれらは自明なものではなく、その考証の当否が個々に検証されなければならないのである。その検証作業を抜きに「広島図」「松江図」の描写が真田丸の縄張を正しく表現したとはいえないであろう。

こうした両図の性格の違いなどを超えて、「地形描写はほぼ一致し、註記には異同がみられるものの、縄張の名称などで相互に補完しあう関係にあることから、真田丸の実態に迫ることができる」という評価を下すのはいささか恣意的な絵図使用ではないかと思われるがいかがであろうか。

3. 「寺」の理解

一方で「松江図」と「広島図」に共通している註記の意義も重要であろう。なぜなら共通する祖本の存在を想定するとき、その成立年代を考えるうえで大きな手がかりとなりうるためである。その意味で注目したいのが「寺」註記である。

この「寺」をめぐって筆者らは前稿で、真田丸の存立した時期から「寺」が存在したとする千田氏の見解を批判したが、千田氏はそれに反論された〔千田 2016〕。そこでここでは反批判をおこない、両図（祖本）の成立年代についてあらためて考えてみたい。

前稿において筆者たちは「広島図」で真田丸のなかに寺院六ヶ寺が描かれていることに着目し、南北方向の三ヶ寺については豊臣時代に開創された小橋寺町の寺院として認められるが、東西方向の三ヶ寺については豊臣時代に設定された寺町に含まれない餌差町の寺院群であること、そして餌差町の寺院群の開創年代を『大阪府全志』の記述に基づいて 17 世紀後半と考えるべきことを述べた。つまり、真田丸存続期に東西方向の寺院が存在したと考えるのは無理があるのであり、それにとまって「広島図」の描写が真田丸存続期までさかのぼることはなく、17 世紀後半以降の作図と理解すべきことを指摘した。

ところが千田氏は、筆者たちが六ヶ寺すべての開創年代を 17 世紀後半と認定したと受けとめ、浄土宗の由緒史料である『蓮門精舎旧詞』において豊臣秀吉の晩年に小橋寺町の寺院が当地に置かれたと伝えていることを無視したという「疑念」を表明した。

しかしその「疑念」は、前稿を普通に読んでいただければ千田氏の全面的な誤読・誤理解によるものであることは明らかである。繰り返しになるが、南北に並ぶ三ヶ寺については小橋寺町に属する寺院であり、それらが豊臣期から存在したことは前稿註（16）において明記している。問題は東西方向の三ヶ寺である。もしかすると千田氏は餌差町の寺院も小橋寺町に含まれると理解したのかもしれないが、それは前稿でも述べたとおり別物である。餌差町が豊臣時代の寺町に含まれないことは、大坂の寺町研究では定説化している⁽⁴⁾。そもそも臨済宗・真言宗といった浄土宗以外の寺院も混在する餌差町の寺院由緒を浄土宗の由緒史料である『蓮門精舎旧詞』によって明らかにすることは不可能なのである。もし餌差町の寺院が豊臣時代までさかのぼると考えるのであれば、積極的な証明が必要であろう。

「広島本」に餌差町の寺院が含まれる以上、その描写が早くとも十七世紀後半以降となると考えた前稿は至極妥当であろう。そして「松江本」にも同じ「寺」の註記がみられるということは、これらの祖本の成立が 17 世紀後半をさかのぼらないことを示唆しているのである。

4. 「広島図」と「松江図」の地形描写について

次に「広島図」と「松江図」が描いている範囲の問題をとりあげたい。筆者らは両図が実際の真田丸以上の範囲を描いていると考えている。

「広島図」と「松江図」を観察して気づくのは、真田丸の主郭の東西にある崖状の表現と南を限る堀状の描写が、江戸時代前半に作成された『大坂三郷町絵図』に描かれている真田山付近の地形の位

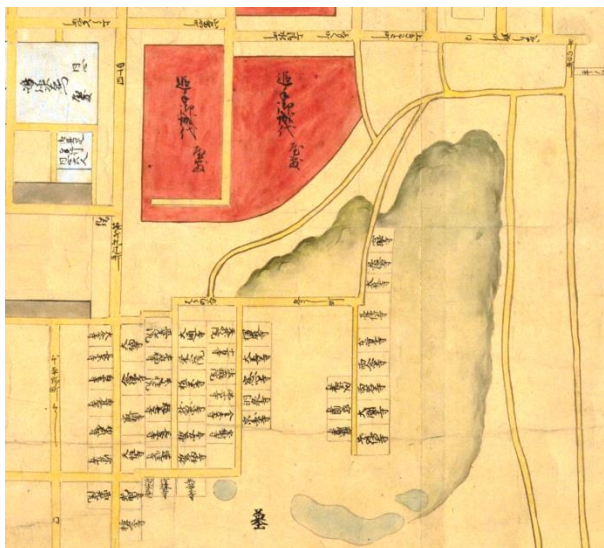


図3 『明暦元年大坂三郷町絵図』部分 明暦元年（1655）



図4 『大坂三郷町絵図』
部分（寛文6～8年
1666～1668）



図5 『大坂三郷町絵図』部分
（貞享元年 1684）

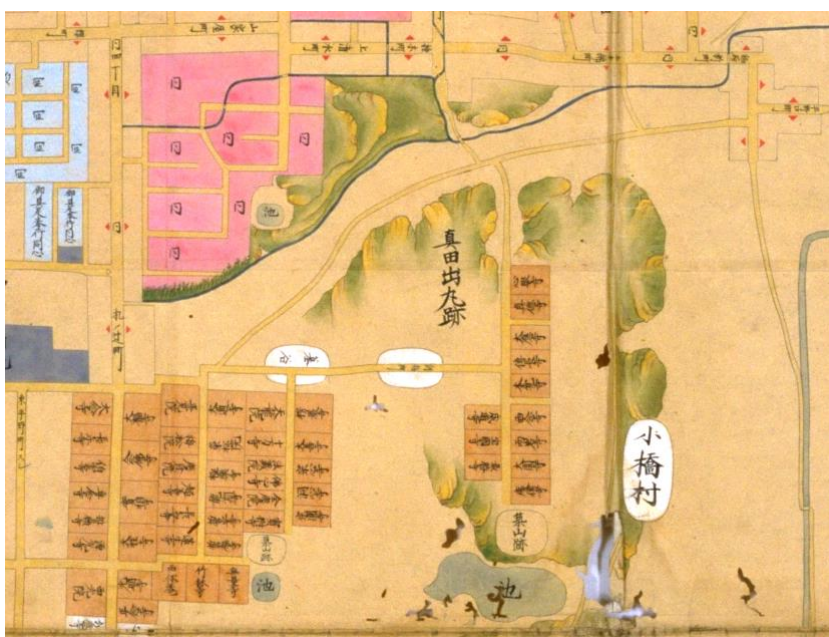


図6 『大坂三郷町絵図』部分
（貞享元～4年 1684
～1687）

置関係と近似していることである。

大阪歴史博物館は明暦元年(1655)刊行の『明暦元年大坂三郷町絵図』(図3)をはじめとして、寛文6～8年(1666～1668)(図4)、貞享元年(1684)(図5)、貞享元年～4年(1684～1687)(図6)の『大坂三郷町絵図』を収蔵している。

『明暦元年大坂三郷町絵図』には「真田山」や「真田出丸跡」等の註記はないが、それ以外の『大坂三郷町絵図』には「真田出丸跡」との註記があり、その場所が特定できる。その場所は西側の「八丁目東寺町」の北端から東に延びる「餌差町」の北に位置し、東の「小橋寺町」の間を通る南北道路の西に位置する。その場所はまさしく現在の明星学園の場所である。

「真田出丸跡」の北側は崖を描写し、崖の北には谷が入り、谷の中には南西から北東方向へと延びる道路が描かれている。この東西方向の道路からは北と南に延びる道路があり、南へ延びる道路は「真田出丸跡」の東にある「小橋寺町」へと続いている。

「真田出丸跡」の東側には「小橋寺町」の寺院群が南北道路に面して並び、さらに東には崖が描写されている。「小橋寺町」の道路の南には「カガ築山」あるいは「築山跡」の注記があり、南に東西方向に長い「池」が描かれる。

「小橋寺町」の南は図3・4では小型の池と大型の東西方向の「池」の二つがあるが、図5・6では小型の池はなく、大型の東西方向の「池」しかない。そして「小橋寺町」の東側の崖の描写は、その南端部が小型の池や「池」の東端に到達している。

東西方向になる大型の「池」の西には「墓」の注記を挟んで小型の丸い「池」が描かれている。これらには「池」の注記があり、青灰色に彩色されていることから、水を湛えていたことがわかる。

図3～6の『大坂三郷町絵図』には西側に「八丁目東寺町」「八丁目中寺町」「八丁目寺町」の寺院群が描かれるが、両図には寺院群は描かれず、崖の描写となっている。ただし、「広島図」には「此辺上本町」と「上本町門口ノ由 西向ト云」の註記がある。両図は崖の描写の南端に南東から北西方向へと延びる窪みとその南端に水がたまっていたのであろうと推定できる青い彩色がある。

『大坂三郷町絵図』と「真田丸図」の相違点を挙げてみる。

- ①真田出丸跡の東西を限る崖の表現が異なる。
- ②『大坂三郷町絵図』では「真田出丸」の西に寺町があるが、「真田丸図」では寺院はなく崖となる。
- ③谷内の東西道路から枝分かれした南北道路に面する寺院の数が違う。
- ④南端部の池の形が異なる。

次に共通点を挙げていくと、

- ①「真田丸」の北に東西方向の谷地形があり、その中に東西方向の道路がある。
- ②谷内の東西道路から北へと延びる道路が枝分かれしている。
- ③谷内の東西道路から南に道路が枝分かれして、そこに数は違うが寺院が南北に並ぶ。
- ④南北の寺院群を通る南北道路の南端に水を湛えた堀や池がある。
- ⑤南端の池は寺院の東側の崖の延長線上にある。
- ⑥南端の池の西にも水が溜まった小型の池がある。

相違点の①については、両図がこの場所を城郭として描こうとしているために、「カラホリ」や「惣構堀」等の注記や、窪んだ地形を堀と見做して描き込んでいるのではないかと推定する。

相違点の②については、筆者らの推定だが、寺町は広がっていたのだが、その付近に見出せた地形の凹凸を城郭の切岸の痕跡と見做し、寺院を描かずに崖を復元したものではないだろうか。

相違点③については、「真田丸図」では南北道路だけでなく、そこから枝分かれした東西方向の道路にも三カ寺描かれているが、この「餌差町」には明暦 3 年（1657）を建立年とする寺院を筆頭に八カ寺あり、その内の三カ寺は 17 世紀代に建立したと伝わる。こうした寺院が描かれている可能性がある。『大坂三郷町絵図』も 17 世紀代に作成されたものであるが、寺院の註記はない。小橋寺町に所在する寺院のような規模のものではなく、町人地に紛れ込んだ小規模の寺院だったのではないだろうか。

相違点の④については、当時存在していた池とその周囲の凹凸のある地形を、城郭の堀のように描いたものではないかと考えている。

こうして考えると、共通点とした①～⑥と先の相違点①～④の解釈を総合すると、両図と四点の『大坂三郷町絵図』に描かれている場所は同じ場所を、違った視点から描いたものであろうとの推測が可能である。多くの想定が入っているが、以上が筆者らの両図への理解である。

では『大坂三郷町絵図』に描かれている特徴的な地形を、その後の大坂の姿から考えてみる。

先ず、共通点の①にあげた「真田丸」の北に東西方向の谷地形とそこにある東西方向の道路であるが、東西方向の谷地形は「清水谷」と呼ばれる自然の谷地形で、この谷を利用して豊臣大坂城の惣構の一角をなす「空堀」が掘られている。この中にある「広島図」で「大和道」と注記されている東西道路は、西方で空堀通り商店街となる道路であろう。

共通点の②にあげた谷内の東西道路から北へと枝分かれした道路は、豊臣期大坂城内では三の丸の武家屋敷の基本となる南北道路へと繋がる道路で、江戸時代から近代には仁右衛門町や越中町と呼ばれる町通りとなっている道路である。

共通点の③にあげた谷内の東西道路から南に枝分かれしている道路は、現在、心眼寺坂と呼ばれる坂道とその南に続く道路である。そこに数は違うが寺院が南北に並ぶ景観は、まさに小橋寺町の景観である。この道路に関して、千田氏は筆者らが「真田丸時代にはなくその後付け替えた道とする。」と述べておられるが、筆者らは前稿のなかで、共通点の②で述べた仁右衛門町や越中町と呼ばれる大坂城内の基幹道路が惣構堀を越えて南に延長された道路であると述べている。誤読されているのであろうか。

共通点の④にあげた小橋寺町を通る南北道路の南端に水を湛えた大型の池は、元和 2 年（1616）に溜池となる味原池で⁽⁵⁾、大正 8 年（1919）に埋め立てられた〔東浜弘静 1985〕。初期の『大坂三郷町絵図』ではその東に小型の池を描くが、貞享以降の『三郷町絵図』では小型の池はなくなっており、姿を消した池があったのであろう。

共通点の⑤にあげた寺院東側の崖は、北は三光神社の東端の崖にあたり、南は現在の真田山公園の東端の斜面を描いたものであろう。『大坂三郷町絵図』では高台の東端に「小長谷村」「小橋村」と注記があり、明治 19 年測量の『大阪実測図』（図 7）では同じ位置に「小橋村」の集落が広がっている。共通点の⑥にあげた南端の池の西側に描かれた水が溜まっている窪みは、「真田丸図」では堀状の窪みの先端部に水が溜まっていたように描かれている。『大坂三郷町絵図』では円形の池として描かれているものだが、これは八丁目東寺町の南端にある伝光寺の南にあった、越前築山を築いた際に土砂を採取した後の穴に水が溜まったものと考えている。『新修大阪市史』史料編第 5 巻大坂城編〔大阪市 2006〕



図7 『大坂実測図』部分 明治19年測量



図8 『五千分一地番入大阪市図』昭和6年刊行 日下伊兵衛作製

に所収されている「石山要録」に見られる記述で「寛永三年秋、備中守阿部正次為下知、先年關戰刻寄手之仕寄場三ヶ所并真田丸ヲ破却ス、真田丸指区々也、小橋宰相山又心眼寺西北ノ方ノ台ヲ真田砦ト云、何モ真田丸戦之記ニ不合、可考見、清水谷城代屋敷真田丸ト云説有、此説可也、古老曰、今清水谷市店ニ地窪成所有、是真田丸ノ頃ノ堀跡ナリ、今世俗ノ云フ真田丸ハ篠山ト云フ、捨櫛ノ跡也、此所、正保ノ頃ヨリ以後迄三昧也、其後小橋中寺町ノ南エ引、其后又越前築山ノ跡ヘ引ル、但越前築山ハ今ノ伝光寺本堂ノ所ト云、南ノ方之池ハ築山ノ土取タル跡也ト云、築山三ヶ所、一所者伝光寺境内、一所者小橋東寺町南ノ端、慶伝寺ノ南ノ方、是加賀ノツキ山跡、一所者玉造大和橋東ノ方、佐和山之築山アト也」（下線筆者）とある。八丁目東寺町の南にある円形の小さな池を堀と見做したのではないだろうか。

以上のように、「真田丸図」に描かれている特徴的な地形を『大坂三郷町絵図』や現在の大坂の地形に当てはめていくと、多くの研究者が推定している真田丸の範囲を越えて、北は清水谷から南は味原池までの広範囲を描いていると推定でき、「真田丸図」からは真田丸の真実の姿に近づくには限界がある。

5. その他の千田氏の批判について

「広島図」と「松江図」に描かれる真田丸は東西と北を崖状に描写し、南は堀状の窪みで囲まれる曲輪状の一面と、その東に崖を挟んで畑として利用されている広い平坦部がある。この平坦部の東端も高低差があるようで、曲輪部の崖描写と同じように小さな墨点を描く。「広島図」も「松江図」も曲輪状の一面とその東に広がる平坦部を紙面いっぱいに描いていることから、本図の作成者は真田丸がこの二つの区画で構成されていると判断したようだ。

曲輪状の区画の南側は「広島図」では「カラホリ」と、「松江図」では「惣構堀」との注記がある堀状の窪みが南を限る。千田氏は、この窪みが「惣構堀」と記されていることが重要と説くが、両図（あるいは祖本）が描かれた時点でこの窪みが存在していて、両図の作成者は現実に見ることができたのである。さらに、この堀状の窪みは両図とも中央部の開口部に接している先端部が青色で彩色されており、「広島図」では東側の「カラホリ」の西端に「此所池」と注記されている。西側の堀の東端も青く彩色されていることから水がたまっていたのだろう。そして、堀状の窪みは東西二つに分かれるように中央部で途切れ開口部となっている。この開口部を千田氏は虎口と解釈されており、真田丸の南正面に曲輪への出入り口があったと推定されることになった。

また、両図の南側の堀状の窪みには、堀底へと下る傾斜路が描かれていることから、真田丸の主郭から堀底に行き来できる通路を備えていたと解釈されている。

千田氏は「真田丸内からの援護射撃を受けつつ、信繁は機を見て堀底に出撃して、堀内の徳川軍に反撃をしたと読みとれるのではないだろうか。」とする。何故、堀底に行き来しなければならないのであろうか。ご本人も同様の通路は非常時の脱出路とするのが一般的であるとの判断をお持ちであるが[千田 2016]、両図に描かれた地形を全て城郭の構造の一部と捉えようとする千田氏の強引な解釈ではないだろうか。

この図にある堀状の窪みを真田丸の堀と解釈する立場からは、このように判断せざるを得ないので

あろうが、筆者らのようにこの堀状の窪みを江戸時代初めから大正年間まで存在した味原池と考えると、味原池へと傾斜する地形を表現したものと理解できる。

堀だけでなく、「真田丸図」に描かれている崖の描写についても、第2次世界大戦後にアメリカ軍が撮影した航空写真の判読結果や地中レーダー探査結果と矛盾しないとするが、航空写真に表れている地形は近代以降に大きく改変された地形であると筆者らは考えている。

千田氏は小橋寺町東側の斜面を真田丸の東端の切岸と想定し、真田丸が円形ではなく方形の曲輪になると推定されている。地理学者の坂井尚登氏も同様な見解をお持ちのようだ〔坂井尚登 2015〕。そこは小橋寺町の寺院群の東端の境界線であり、江戸時代の絵図でも寺院敷地を南北の直線で示している。寺院敷地の奥行きを一定にするために直線となったものであり、当然の姿であろう。問題は、そこに東側が低くなる段差が存在している地形から、真田丸の東側の端が南北方向に直線となっていたと推測されたことにある。この地形が江戸時代以前の姿を残していると考えてよいのかどうかである。筆者らはここにある南北方向の直線で続く東に低くなる段差は、明治4年(1871)に真田山旧陸軍墓地がこの地に設営された結果であると考えている。真田山旧陸軍墓地が造営されたこの地は、江戸時代までは上町台地東端に立地する三光神社から真田丸跡まで続く斜面地であり、畑地が広がっていた。明治4年に三光神社背後に設営された陸軍墓地はそれ以来敷地を拡張させながら、昭和6年(1931)までには現在の範囲以上に拡張されていた(図8)。この設置・拡張工事によって墓石を建立しやすい平坦地として造成されたと推定している。その結果が小橋寺町東端と旧陸軍墓地西端の境界線に段差のある直線の崖が生じたのであろう。

地中レーダーの探査結果については、千田氏はどの位置に、どのような形状で堀状の窪みが埋没しているのか、地形図との対照を含め客観的な検証作業が可能な形で一切公表していない。それに加えて、レーダーの探査結果から堀が存在していると判断された地点で2016年11月28日から12月9日にかけて発掘調査がおこなわれたが、そこには堀状の窪みはなく、地表下約1mで上町台地の洪積層の地山が広がり、古代の柱穴が点在していた。この結果を受けて千田氏は、堀の位置は南の高津高校敷地の北端部付近と修整された(千田 2017)。

千田氏は「今日の城郭研究では、基本的な調査として広く地表面観察が行われており、熟達した研究者は400年以上前の城の姿を地表面から観察して適確に図面化している。」として、現在の城郭跡の踏査によって縄張り研究が進んだことを例に挙げ、「真田丸図」作成時点においても図にあるような地形が残っていたから図化できたと考えられているようだ。その点については筆者らも同感である。

しかし、現在の城郭の縄張り調査で復元が可能なのは、水田が広がる農村地帯にある居館や山間部にある山城などの場合であって、豊臣秀吉による城下町建設以降、現在まで都市として拡大改変を受けた大阪では、惣構の南堀に近い空堀通り商店街付近にはその痕跡と推定される高低差を残しているが、その当時の地形を発見することは難しいと考える。実際、2003年に大阪城公園の南西にある大阪府警察本部敷地での調査では、予想もしていなかった幅約20m、深さ約4mもの巨大な堀が発見されている。都市はそこに住まう人々の要求によって、斜面が雛壇状の地形に造成されたり、急斜面をなだらかな斜面に変えたり、深い谷を埋めて広い平坦地を確保したりして生活空間を広げてきているのだ。まして、筆者らの理解のように「真田丸図」は信繁が築いた真田丸だけを描いたものではなく、その周辺まで真田丸跡と理解して描かれた図であることを踏まえると、その図には多くの研究者が考えて

いる真田丸の位置に、その痕跡が存在していなかったことになるのではないか。

おわりに

先にも引用したが「石山要録」には興味深い記述がみられる。「寛永三年秋、備中守阿部正次為下知、先年闘戦刻寄手之仕寄場三ヶ所并真田丸ヲ破却ス」という記述である。真田丸は冬の陣後に破却を受けた後、寛永3年(1626)にも大坂定番に着任した阿部正次の指示により破却されたというのである。阿部は自身の屋敷地を大坂城の西側・南側に確保しているので〔宮本裕次 2012〕、この破却はその用地整備と連動したものである可能性が高い。もっとも実際に屋敷地が設定されたのは清水谷の北方であり、真田丸の故地が含まれたわけではなかったが、土地整備については広範におこなわれた可能性をうかがわせる記述として注目される。

「広島図」「松江図」はこうした数度の改変を受けたのちの地形がベースになっているのであり、17世紀後半の現状を描く図としてその重要性を理解すべきである。

註

- (1) 奥付だけをみると本書(2015c)は2015年11月20日刊であり、次著の『真田丸の謎 戦国時代を「城」で読み解く』(2015b)は2015年11月10日刊となっている。しかしながら、千田氏のその後の所論の展開をみると研究史的には逆の順番で取り上げるほうが妥当とみなせる。
- (2) 「諸国古城之図」の原本の成立時期に関しては、天和3年(1683)頃とする研究がある(矢守一彦「浅野文庫蔵「諸国古城之図」について」(『浅野文庫蔵諸国古城之図』新人物往来社、1980年)。
- (3) その後、NHK歴史秘話ヒストリア「徹底解明!これが”真田丸”だ」(2016年1月6日放映)では千田氏監修の真田丸の復元縄張り内に寺院が描かれていた。
- (4) 内田九州男「城下町大坂」『日本名城集成 大坂城』小学館、1985年
- (5) 前稿で「真田丸図」の南端の堀を味原池と考えた理由のひとつにその北側に書き込まれている「此道二丁程有」を挙げた。これに対し千田氏はこの書き込みの「二丁」とは大和道からの分岐点より堀までの距離とみなせると反論された。しかし補足すると、筆者たちはこの道の南端がフェイドアウトする描写であることに注目している。これはその先の描写を省略しているという意味で、絵図ではしばしばみられる表現である。千田氏の考えが正しければ、六ヶ寺から南端の堀までは目と鼻の先になり、この道の描写をあえてフェイドアウトさせる必要はない。餌差町付近から堀までの道の描写を省略したためにこうした描写とし、それを補うために「此道二丁程有」をわざわざこの場所に記入したと考えるのが妥当であろう。

参考文献

大阪市 2006 『新修大阪市史』史料編第5巻大坂城編

大澤研一・松尾信裕 2016 「真田丸について―「真田丸図」と構造の検討―」『2016年NHK大河ドラマ特別展「真田丸」』

NHK・NHKプロモーション

公益財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所・大阪歴史博物館 2014年、『(独)日本学術振興会科学研究費補助金『大阪上町台地の総合的研究―東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型―』基盤研究(A)報告書

- 坂井尚登 2015 「大坂城真田丸—絵図・地形図・空中写真によって考察する位置と形状—」『城郭史研究』第34号
- 千田嘉博 2015a 「新説！「真田丸」は孤立無援の二重構造の巨大な要塞だった！」『歴史人』通巻55号、KKベストセラーズ
- 千田嘉博 2015b 『真田丸の謎 戦国時代を「城」で読み解く』NHK出版
- 千田嘉博 2015c 『真田信繁「勝利」への条件』三笠書房
- 千田嘉博 2016 「新発見の大坂 真田丸」絵図の学術的価値について『松江歴史館研究紀要』第5号
- 千田嘉博 2017 「真田丸の復元」『真田丸発掘調査報告講演会』真田丸発掘推進協議会
- 東浜弘静 1985 「味原池造池年代私考」『きょうどしいくの』9 郷土誌いくの刊行会
- 松尾信裕 2017 「『諸国古城之図』所収「摂津真田丸」図の再検討」『大阪歴史博物館研究紀要』第15号
- 宮本裕次 2012 「江戸時代大坂城周辺の武家地について」『大阪城天守閣紀要』39号

(おおさわ・けんいち 大坂歴史博物館学芸課長・学芸員)

(まつお・のぶひろ 大阪歴史博物館研究主幹・学芸員)